

Ⅲ 「内モンゴル敖漢旗喇嘛溝の遼墓壁画に認められる、台形胴の長頸リュートについて」

等々力 政彦

はじめに

モンゴル民族を表象する楽器ともいえる、弓奏楽器のモリン・ホール морин хуур（日本や中国では一般に「馬頭琴」とも）の胴は、下に広い台形をしている。この形状は、世界のリュートタイプの楽器としてはひじょうに特徴的であり、管見のおよぶかぎりでは、モンゴル国と新疆北部、内モンゴル自治区、そしてそれらの地域と歴史的に深い関係のあるロシア連邦内のブリアート・モンゴル人の居住するブリアート共和国・イルクーツク州・ザバイカル地方、そしてトゥバ共和国、アルタイ共和国（および、あるいはアルタイ地方にも）にのみ認められる。この台形胴の弦楽器の分布が、歴史的にも維持されてきている可能性を示唆するのが、ここで紹介する喇嘛溝の壁画である。しかも、その歴史は10世紀から12世紀の遼代にさかのぼるのである。

この遼代の壁画に描かれた楽器が、モリン・ホールと酷似していることは、すでにいくつかのインターネット・サイトや文献で触れられている。しかし、詳細に検討されているとはいえない。そこで本論文では、アジア中央部の弦楽器の歴史と分布を検討し、喇嘛溝の壁画の楽器をめぐる状況をより立体的に示すことを目的とした。その上で、この壁画の楽器を軽々に弓奏楽器モリン・ホールと結びつけることがむずかしい点を指摘したい。さらに総合すると、当該地域の契丹の楽器は西のオイラト・モンゴルに受け継がれ、東モンゴルではやがて弓奏楽器に変化していったのではないかという歴史的推移が考えられた。

遼代墳墓の壁画に描かれた楽器について

内モンゴル自治区赤峰市敖漢旗喇嘛溝（PL.1.a）の遼代の墓室壁画に台形胴の楽器が認められることは、近年いくつかの文献や中国のインターネットサイトで紹介されている（たとえばSo 2004: 17；孫2009: 188）。学術的調査としては、邵国田（1999）が詳細を伝えている。それによると、墓室の形態は現在のモンゴルな



PL.1 喇嘛溝の位置 (a) と墓室の契丹大字 (b) (邵1999より)

どの遊牧テントにみられるように、下部が八角柱でその上に錘状の屋根が乗った構造になっており、ほぼ南東に向かって入口が開いている (邵1999: 90)。墓室の入口左側には文字が書かれており (PL. 1. b)、論文中では触れられていないが、契丹大字と考えられ、特定の年号が記されているようである。今後これが解読されれば、墓室の年代、すなわち樂器が描かれた正確な年代がきらかとなると期待される。現在までのところ、遊牧テント状の墓室の形態から、遼代晩期のもと考えられている (邵1999: 95)。

樂器が描かれている墓室の壁画は、7枚の壁のうち西壁のもので、「^{びりょうず}備獵図」と呼ばれている5人の従者の図である (PL. 2: 邵1999: 92-93, 95)。従者は2列に描かれており、そのうちの後列右の従者が樂器を抱えている。前列右の従者と樂器を持った従者を除く3人は、それぞれブーツ、鷹、弓と矢をたずさえていることから、その名の通り、従者は墓の主人にしたがって狩りに向かうところなのであろう。『遼史』卷五十四樂志・国楽には、春に皇帝がガチョウを射る行事に際して、数十人の樂人が小樂器を演奏し酒をすすめる、という記述が認

1 タカ目タカ科の鳥類の総称のひとつ。比較的大型のものを鷲、小型のものを鷹というが、生物学的特徴によらぬ慣習的な分類である。鷹狩りには鷹が用いられることも鷲が用いられることもあり、じっさいモンゴル国西部のカザフ人は、大型の鷲であるイヌワシ *Aquila chrysaetos* を使った鷹狩りをおこなう。

められる（脱脱ほか1974：882）。邵はこれを引いて、この楽人は宴会の楽しみをおこなう者であるとしている（邵1999：96-97）。一方でこの楽人は、演奏することで狩りを鼓舞したり、あるいは呪術的な演唱をおこなったりしたのではないかと推察される。その傍証として、契丹人と歴史的・言語的に近いモンゴル人において、武器としての楽器の使用が報告されていることがあげられる。たとえばマルコ・ポーロは、いわゆる『東方見聞録』の中で、フビライ



PL.2 備獵図（敖漢旗博物館所蔵）

のモンゴル軍とナヤンの反乱軍との戦いに際し、モンゴル軍が戦闘開始前に、太鼓の演奏に先立って、2弦の楽器を演奏しながら歌うことについてふれている（Polo & Benedetto 1928：訳書258；Polo *et al.* 1938: 198; Polo *et al.* 1993: 337）。コルディエは、クラーク Clarke 博士の言を引いて、この2弦の楽器とは撥弦楽器（バラライカなど）であると断じている（Polo *et al.* 1993: 339）。また、泰定乙丑年（1325）にまでさかのぼる最古のモンゴル語漢語辞書である『至元訳語』（石田1973：91-92）のうち、Ligeti & Kara（1990）が底本とした内閣文庫所蔵の弘治丙辰年（1496）の版には、「三絃子」すなわち現在の三絃（三味線）に比定される楽器が、「胡不爾 qubur²」として「軍器門 les instruments militaires」の内にみ

2 9世紀にまでさかのぼる、楽器一般をあらわす古代テュルク系言語のコブズ *qobuz/qopuz* は、モンゴル系言語に借用され、語中の子音が $b/p > \gamma > \emptyset$ 、語末の子音が $z > r$ と変化して、ホール *quur* となったと考えられている（Kara 1990: 319）。このコブル *qubur* の語は、その変化の途中をとらえていると考えられ、ひじょうに興味深い。この語の歴史的変化に関しては、これまで触れられていないようなので、ここで触れておく。

える (Ligeti & Kara 1990: 267)。ただしこの「軍器門」を、「車器門」、あるいは単に「器門」とする版がある (長田1953: 94; 竹越2006: 2)。

壁画の楽器の描かれ方は細かく、木製のベグに滑り止めと考えられる線状の彫り物がほどこしてあることまでわかる。これを信じると、ネックにフレットはなかったとしてよいであろう。胴の表板が皮なのか木なのかは、画像だけからははっきりとはしない。表板の中央より下部には、ブリッジが認められる。

この楽器が、ホルンボステル・ザックス分類による「長頸リュート³ Stiiellauten」に分類されることは一般に認めうるであろうが、インターネットなどで無批判に比定されているように、弓奏楽器であるモリン・ホールの祖先楽器であると、はたして単純に考えてよいであろうか？

台形胴で2弦という特徴は、現在のモリン・ホールの形状とまさに一致するといつてよい。しかし一方で、この特徴はモンゴル国西部の撥弦楽器であるトブシュール товшуур (ハルハ・モンゴル語ではトブショールと発音) の特徴とも一致するのである。したがって、楽器の形態のみから軽々に弓奏楽器に比定することはできない。この楽器がどのようなものであったのかは、文献史料などからきちんと考察されなければならないであろう。

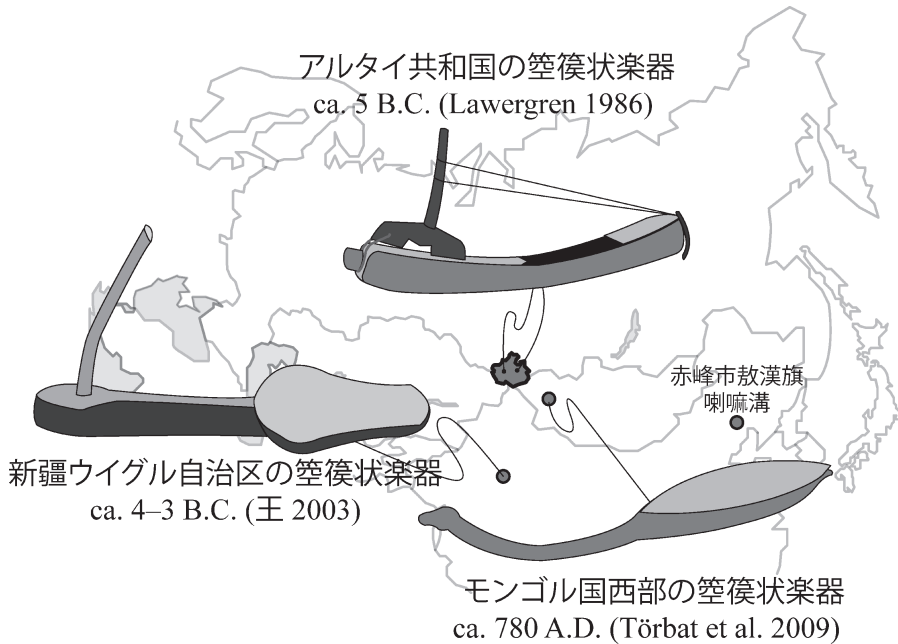
喇嘛溝をとりまく、楽器環境

漢語文献による中国とその周辺域の音楽の記述は、『礼記』中の「楽記」や、司馬遷の『史記』中にある「楽書」のように、紀元前にさかのぼることができる。それ以降も、二十四史の楽志などに音楽に関する記述が継続して認められる。しかし詳細な楽器の形状や演奏方法に関しては、壁画の楽器とほぼ同時代にあたる12世紀初頭の⁵ 図説音楽百科事典、陳暘『楽書』にいたって、ようやく

3 Hornbostel-Sachs 楽器分類で、321.3に分類され、ギター、バイオリンなどを含む分類群 (Hornbostel & Sachs 1914: 579-580)。

4 たとえば新華網は、典拠を示さぬまま「奚琴」などを引き合いにして、この楽器が馬頭琴の祖先である可能性について冒頭で触れている (2013年11月19日)。
http://big5.xinhuanet.com/gate/big5/news.xinhuanet.com/collection/2006-01/23/content_4088767.htm

5 『中国音楽詞典』では、1103年に宮廷に献上されたとしている (中国芸術研究院音楽研究所1985: 45)。

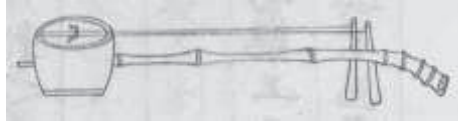


PL. 3 喇嘛溝周辺の遺跡から発掘された楽器

知ることが可能となるといってよいであろう。一方、断片的な情報ではあるが、しかし確実な証拠として、考古学資料としての楽器もみついている。ここではそれらを用いて、喇嘛溝の弦楽器についての考察をおこなう。

アジア中央部から東北アジアにかけて出土する弦楽器は、いくつか知られている。そのうち、リュートタイプの楽器に比較的近いものをPL.3に示す。ここでは便宜上、中国の影響が考えられる琵琶などの楽器類は除いてある。これをみると、紀元前千年紀中期から千年紀中期過ぎまで、アジア中央部から出土する弦楽器は、堅型ハーブ angular harp (Hornbostel & Sachs 1914: 580; Rudenko 1953: 324, Tab. LXXXVI 1; Lawergren 1986: 164; 王2003: 258-260)、そして弓型ハーブ⁶ arched harp (Hornbostel & Sachs 1914: 580; Törbat *et al.* 2009: 373-

6 シュルツ Schulz, S. は、モンゴル国西部から出土した楽器 (Törbat *et al.* 2009) のネックの頭部に、柱の存在を想定して再構築し、堅型ハーブとしている (Waugh 2012: 161)。



PL. 4 奚琴（陳・王1979より）

375) といった、箜篌状の楽器であることは注目される。しかしこれまでのところ、台形胴楽器の発掘報告は知られていない。

先述した『楽書』からは、擦弦楽器に関連した楽器として、卷一百二十八に登場する奚琴（あるいは嵇琴、稽琴とも）がみえ、また同卷に胡琴がみえる（陳暘・王雲五1978）。

前者の奚琴（PL. 4）は、現在の内モンゴル中部にあった奚（庫莫奚）の2弦の楽器で、円筒胴で、両弦の間に竹の棒をはさんで弦をこする擦弦楽器であった。したがって、この楽器が後世の弓奏楽器に与えた影響は考えられるものの、これ自体は弓奏の楽器ではない。朝鮮半島においては、仁宗二十三年（1145）に撰進した『三国史記』卷三十二の祭祀・楽には弓奏楽器は認められない（金・井上1980：95-123）。1418-1450年の世宗年間における記録である『世宗實録』卷一百三十二にいたって上記の奚琴があらわれ、2弦の弓奏楽器として図示されている（学習院東洋文化研究所1955：121）。朝鮮半島においては、奚琴の演奏方法が元代をへて竹片から弓に置き換わったか、あるいは弓奏楽器になった奚琴が伝播したと考えられる。

一方の胡琴は、後述するように、14世紀の『元史』ではあきらかに弓奏楽器であるが、ここでは「胡琴は琴の一種である」とあり、またこの楽器は「弾」ずるものであって、「^ひ拉」くものではなかったことから、12世紀当時に擦弦楽器であったとは考えにくい。さらに、11世紀後半（1085年から1095年の間）に執筆された『夢溪筆談』にも、「馬尾胡琴」という記述が認められる（沈・梅原1978-1981：116）。しかしこの楽器も、馬の毛が用いられたのは弓ではなく弦の方であると考えるのが妥当であろう。夢溪筆談の記述は、歌の詞であって、楽器を詳述するものではない。したがって、ここから詳細を捉えることはむずかしい。

7 現在の朝鮮語では、ヘグム 해금 *hae-geum*（金・姜1979：7）。

いずれにせよ、これらの史実からでは、13世紀までに当該地域に弓奏楽器があった確実な証拠は得られない。

続く13世紀以降の元代から明代にかけて、ようやくモンゴルにおける弓奏楽器が文献に登場することとなる。『元史』卷七十一・樂志の「宴樂之器」にみえる、胡琴である。この楽器は、「つくりは火不思のようである。ペグボックスはネックから反っている。頭に龍の彫り物があり、2弦。弓の弦は振ってあり、馬の尻尾の毛でできている」となっている（宋ほか1997: 1772）。ここではじめて、確実な弓奏楽器が漢語文献に登場するのである。

元代になって、初めて弓奏楽器がこの地域にあらわれた可能性を示唆するのは、他にもある。それは、ヨーロッパ人として初めてモンゴル帝国への旅を記録したカルピニ Iohannes de Plano Carpini（期間は1245年から1247年）と、ルブルック Guillelmus de Rubruc（期間は1253年から1255年）がもたらした、当時のモンゴルの弦楽器についての若干の報告（Wyngaert 1929: 110, 176, 190）からの推察である。この記録には、撥弦楽器と考えられるキタラ *cithara*⁸（Lewis 1891: 132; Wright 2001）は登場するが、弓奏楽器を意味するフィドル⁹は登場しない。そればかりか、ルブルックは「フィドルはみえない¹⁰」としている。このことから、ヨーロッパ人の目からも、13世紀のモンゴルにおいて、いまだ弓奏楽器は一般的ではなかった、としてよいであろう。

モンゴル語において、弓奏楽器の名称の初出は、現代モンゴル語から考えら

8 彼らの報告からは、*citar*, *cithar*, *cither* と綴りにばらつきがある。ここでは、すべて同様の楽器をさすものとみなす。

9 ここでは一般になじむように、英語由来の「フィドル」の語を用いたが、原文のラテン語では *viella* である。フィドル（およびそれと語源を同じくする *viella*, *viola* など）は、もともとは弓奏楽器のみを意味するものではなく、撥弦楽器も意味していた（Remnant 2001: 767, 771）。またフランスでは、ときに *vielle* がハーディー・ガーディーを意味することがあった（Remnant 2001: 768）。しかしフィドルの語は、13世紀までには、今日のように肩の周辺に上向けてあてて弓で演奏する楽器として、ヨーロッパに広く浸透していた（Remnant 2001: 767-768, 771-772）。また、彼らのモンゴルへの旅は、個別の国を代表するものではなく、キリスト教圏のヨーロッパの代表といった、国際的な性質をもっていた。したがって、当時のヨーロッパの楽器の状況を勘案すれば、この語が弓奏楽器以外を指した可能性はかなり低い、といてよいであろう。

れるようなホール¹¹ *quγur* ではなかった。康熙56年(1717)に完成した『滿蒙合璧清文鑑』にある、キキリ *kikili* (Öbür Mongγul-un Mongγul kele udq-a jakiyal teüke sudulqu γajar 1977: 360) がそれである。この楽器名は、現在の内モンゴルでのモリン・ホールに対応する呼称、ヒール *kigili* [xil ~ xil]¹² (内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所1999: 628) として受け継がれている。この語はテュルク語起源と考えられ、弓奏楽器が西から東、つまりテュルクからモンゴルへと伝播した可能性をうかがわせる(等々力2010: 31-32)。さらに下って、19世紀半ばのKowalewskiのモンゴル語辞書にいたっても、ホール *quγur* はバラライカ・リュート・ギターといった撥弦楽器を意味し(Kowalewski 1844-1849: 886)、弓奏楽器(2弦もしくは4弦)はキキリ *kikili* であった(Kowalewski 1844-1849: 2545)。

上記の報告からは、モンゴルの弓奏楽器は元代以降にあらわれ、清代にいたっても名称はキキリであり、ホールではなかったことがわかる。

次に、台形胴の楽器の歴史について論述する。

台形胴楽器と「馬頭琴」の歴史

現在、撥弦・擦弦を問わず、台形胴楽器はアジア中央部から東北アジアにか

10 より正確には、*Citaras* [sic] et *viellas nostras non vidi ibi, sed multa alia instrumenta que apud nos non habentur* (われらのキトラやフィドルはみえないが、われらが持たないたくさん他の楽器がある)(Wyngaert 1929: 176)である。一方で、「キトラがみえない」と書いてある点は矛盾しているようにみえる。しかしこの点は、当時ヨーロッパにみられたようなキトラはないが、撥弦楽器はあった、と解釈するのが妥当であろう。さもなくば、他の場所で再三にわたって *cithara* が登場する意味を失う。それらの楽器が弓奏楽器であれば、彼らはそれを *viella* の名で表現したであろう。

11 ホールには、楽器一般の意味も含まれているため、擦弦楽器にホールの語がついていることは不自然ではない。実際、西モンゴルのオイラト・モンゴルからは、本文中に触れた18世紀中頃の『欽定皇輿西域圖志』の中に、皮張り・円形胴の弓奏楽器をイキル・ホール(伊奇爾呼爾 *ikil xuur*)として、楽器名にホールの文字が付加されているのがみえる。ここで注意したいのは、モンゴル語には擦弦楽器をあらわす単語があるにもかかわらず、それが使用されなくなった点である。イキルは擦弦楽器をあらわすテュルク語系由来の語と考えられ、ここであげたキキリも同系の語と考えている(等々力2010: 31-32)。

12 ほかに、歌口のない縦笛 end-blown flute も意味するチョール *čuyur* ~ *čoyor* (内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所1999: 1285) の名で呼ばれることもある。

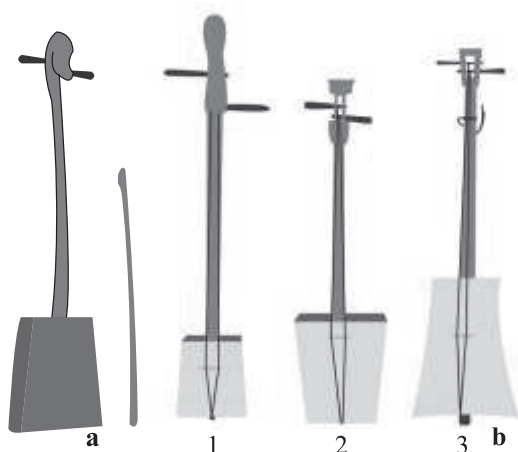


PL.5 現在の台形胴楽器の分布 (a) と喇嘛溝の台形胴楽器 (b)

けて、モンゴルと関係の深い地域に認められる (PL.5.a; Vertkov *et al.* 1975: 186, 189, Fig. 715, 722, 726)。

文献における台形胴の楽器は、乾隆21年 (1756) から47年 (1782) にかけて編纂された『欽定皇輿西域圖志』に登場するものが初出であろう。この書は、清の版図が現在の新疆域におよんだことにより、西域の詳細な情報がかつたらされてできた。同書卷四十「音楽」に、「準噶爾部」としてオイラト・モンゴルの13の楽器の詳細な報告と、楽譜が紹介されている (傅ほか1965)。その中に「圖布舒爾」、すなわち先述のトブシュールがはじめて台形胴の撥弦楽器として登場する。

ようやく20世紀に入ってから、外国人研究者によって、モンゴル系民族における台形胴の弓奏楽器の記録があらわれはじめる。初出は、おそらく鳥居きみ子で、明治40年 (1907) から41年 (1908) にかけての調査旅行において、内モンゴルの西ウジムチン旗の役人の家で「ムリントロガイヌホーレ」(等々力注: *morin toluyaiyin quyur*) という楽器を入手し、モンゴル語をそのまま漢語訳して「馬頭琴」と名付けた (PL.6.a; 鳥居1927: 371)。注意したいのは、この楽器が「珍しいもの」であった点である。また鳥居は、当時のモンゴル国と内モンゴ



PL. 6 20世紀初頭のモンゴルの台形胴弓奏楽器
 (a) ウジュムチンのモリン・ホール (鳥居1927: 371, 1113)。
 (b) 内モンゴルのさまざまな台形胴弓奏楽器1: チャハル・
 モンゴル; 2: ホルチン・モンゴル; 3: ザハチン・モンゴル
 (Emsheimer 1943: Pl. VII)

ら1939年にかけて広くモンゴルを渡り歩いて音楽の調査をし、主に内モンゴルから台形胴の弓奏楽器¹⁴のコレクションをデンマークにもたらした (PL. 6.b1, 2, 3)。

これら20世紀中頃までの初期の台形胴弓奏楽器のコレクションは、表板はす

ル国境付近のボイル湖周辺では、王府でこそ様々な楽器が認められたが、モンゴル固有の楽器としてはモリン・ホール以外には四胡と横笛のみである点 (鳥居1927: 1110-1112)、モンゴル固有の撥弦楽器は認められない点 (鳥居1927: 1113) など、東モンゴルの楽器についての貴重な情報を盛り込んでいる。続いて、デンマークのハスルンド・クリステンセン Henning Haslund-Christensen は、1928年から

13 これに対し、明治40年代から大正初期にかけて中国東北部に少年時代を送った服部は、この訳名が「すでに中国語にあった」、と記憶している (服部1977: 180)。一方で、鳥居の調査と同時代の Moule (1908) は、漢語の馬頭琴には触れていない。鳥居以降、知る範囲で漢語の馬頭琴について触れたものは、Alender (1958: 26-27) が内モンゴルの楽器として紹介するまで、みえない。同年、塞野 (1958) は『中国民間故事選』に、「馬頭琴」という内モンゴルの民話を再話している。この物語は、重訳をへて1961年に日本で絵本となり、1965年には光村図書の小学校教科書に「白い馬」として採用され、1974年より「スーホの白い馬」と改名し、有名になった。筆者は、馬頭琴の語が中国内において広く知られるようになるのも、塞野の物語によるのではないかと考えている。

14 ハスルンド・クリステンセンは、この楽器をすべてヒル・ホール「khil khuur」の名で記載している。この「ヒル」の語は、先述したヒール *kikili* を指しているであろう。

べて皮張りであり（鳥居1927：371、1113；Emsheimer 1943: 83; Alender 1958: 26）、ヨーロッパ楽器の影響で表板が木製でf字孔のある現在のモンゴルのモリン・ホールとは、おおきく異なっている。また馬頭のついた弓奏楽器は、20世紀中頃まではチャハル・モンゴルからのみ報告されており、このタイプの弓奏楽器がモリン・ホールとして、モンゴル国やロシア連邦内でも「規格化」されたのは比較的最近のことである（Pegg 2001: 69; Marsh 2009: 46-72, 100-120）。PL. 6にもみられる通り、古いモンゴルの弓奏楽器は、頭に装飾を施されていないものが多い。

おわりに

管見によれば、台形胴の楽器の文献上の初出は18世紀である。しかし喇嘛溝の例は、それよりも千年近くも前に当該地域に台形胴の楽器があったことを示しており、ひじょうに貴重な記録である。一方で東モンゴルでは、清代の弓奏楽器にはキキリの語があてられていた。つまり、モリン・ホールの語が弓奏楽器にあてられるようになったのは、比較的近年の現象なのである。

歴史上弓奏楽器が登場するのは、9世紀後半にまでさかのぼる可能性のあるタジキスタン南部の壁画が最古であり、これ以降も11世紀にいたるまで主に中央アジアを中心に発展する（Bachmann 2001: 130-131；等々力2010：27-28）。したがって、同時期に喇嘛溝の周辺に弓奏楽器があったとは考えにくい。実際、喇嘛溝の壁画の楽器演奏者は弓をもっていないのである（邵1999：96）。弓が描かれていない楽器をとりあげて、形状が似ているからといって弓奏楽器とすることは、むずかしいといわざるをえない。

以上のことから、喇嘛溝の台形胴楽器は撥弦楽器であり、弓奏楽器である現代のモリン・ホールに比定す



PL. 7 台形胴楽器の分布域（黒い太枠）と、その分類撥弦楽器（濃色）と弓奏楽器（白抜き）。分布の境界面では両者が共存している。右下の濃色の点は喇嘛溝。

ることは、むずかしいと結論される。ただモリン・ホールの雛形として、このような台形胴の弦楽器が強い影響を及ぼしたことは、確実であろう。しかしそれは同時に、トブシュールのような台形胴の撥弦楽器の雛形にもなったと考えられ、しかもそれこそが、当時の契丹人の楽器の直接の後裔と考えられるのである (PL.7)。

以上、喇嘛溝の台形胴楽器について考察してきた。喇嘛溝の台形胴楽器が、どのように発達してきたのか、また当該地域周辺の台形胴楽器の発達に喇嘛溝の楽器壁画がどのように寄与したのか、さらに現在の台形胴楽器がどのようにこの地域の人々に受け継がれてきたのか、というおおきな疑問は残されたままである。ただ趨勢をみるに、契丹時代の古い撥弦の台形胴楽器は、18世紀中頃までに西のオイラト・モンゴル、および歴史的にオイラトと深い関係にあるトゥバヤアルタイなどの民族に伝播して遺され、当該地域を含む内モンゴルとモンゴル国東部、およびブリアートでは、20世紀初頭までに弓奏楽器に置き換わっていったのではないかと考えられるのである。

謝 辞

大谷大学真宗総合研究所と武田和哉准教授には、筆者に研究の機会をご提供いただいた。また、ニューヨーク市立大学の Bo Lawergren 教授には、貴重な資料とコメントをいただいた。また、敖漢旗博物館所蔵の備獵図 (前掲 PL.2) に関しては、武田准教授を通じて、同博物館長の田彦国氏からご指導とご便宜を頂戴した。記して御礼申し上げる。本論文のための調査の一部は、北海道大学スラブ研究センター平成25年度「スラブ・ユーラシア地域 (旧ソ連・東欧) を中心とした総合的研究 (プロジェクト型)」の補助を受けた。

参考文献

- Alender, I. Z. 1958 *Muzykal'nye instrumenty Kitaya illyustrirovannyi ocherk*.
Moscow: Gosudarstvennoe Muzykal'noe Izdatel'stvo.
- Bachmann, W., et al. 2001 "Bow." *The New Grove dictionary of music and musicians*. vol. 4, 130-149, London: Macmillan Publishers; New York: Grove's Dictionaries.
- 陳暘・王雲五1978『樂書』第14冊、台北：台湾商務印書館。
- 傅恒ほか1965『欽定皇輿西域圖志』第5冊、台北：文海出版社。

- 學習院東洋文化研究所1955『世宗實録』第4冊、東京：學習院東洋文化研究所。
- Emsheimer, E. 1943 "Preliminary remarks on Mongolian music and instruments."
The music of Mongols, Part 1: Eastern Mongolia. 69-100, pl. I-VIII,
Stockholm: Tryckeri Aktiebolaget Thule.
- 服部龍太郎1977『モンゴルの民謡』東京：開明書院。
- Hornbostel, E. M. von & C. Sachs 1914 "Systematik der Musikinstrumente."
Zeitschrift für Ethnologie vol 46: 553-590.
- 石田幹之助1973 [1964]「[至元譯語]に就いて」『東亞文化史叢考』87-111、東京：
東洋文庫。
- Kara, G. 1990 "Zhiyuan yiyu index alphabetique des mots mongols." *Acta
Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 44 (3): 279-344.
- 金琪洙・姜思俊1979『奚琴正樂』Seoul：銀河出版社。
- 金富軾・井上秀雄1980『三国史記』第3冊、東京：平凡社。
- Kowalewski, J. É. 1844-1849 *Dictionnaire mongol-russe-français, dédié a sa majesté
l'empereur de toutes les Russies.* vol. 1-3. Kazan: Imprimerie de l'Université.
- Lawergren B. 1986 "The harp of the ancient Altai people" *Royal Swedish
Academy of Music.* 53 (1): 163-177.
- Lewis, Ch. T. 1891 *An elementary Latin dictionary.* Oxford: Oxford University
Press.
- Ligeti, L. & G. Kara 1990 "Un vocabulaire sino-mongol des Yuan le *Tche-yuan yi-
yu.*" *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 44 (3): 259-277.
- Marsh, P. K. 2009 *The horse-head fiddle and the cosmopolitan reimagination of
tradition in Mongolia.* New York; London: Routledge.
- Moule, A. C. 1908 "A list of the musical and other sound-producing instruments of
the Chinese." *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society.*
39: 1-160.
- 長田夏樹1953「元代の中・蒙對譯語彙「至元譯語」」『神戸外大論叢』4 (2・3)：
91-118。
- 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所1999『蒙漢詞典(增訂本)』呼和浩特：内蒙
古大学出版社。
- Öbür Mongyul-un Mongyul keke udq-a jakiyal teüke sudulqu γajar 1977『二十一卷
本辞典』呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- Pegg, C. 2001 *Mongolian music, dance, & oral narrative.* Seattle: University of
Washington Press.
- Polo, M., L. F. Benedetto 1928 *Marco Polo, il Milione.* Florence: Leo S. Olschki
(tr. Ricci A. 1931 *The travels of Marco Polo: translated into English from the*

- text of L. F. Benedetto*. London: Routledge & Kegan Paul; 愛宕松男訳2000 [1971]『[完訳] 東方見聞録』第2冊、東京：平凡社。
- Polo, M., A. C. Moule & P. Pelliot 1938 *Marco Polo the description of the world*. vol. 1, London: G. Routledge.
- Polo, M., H. Yule & H. Cordier 1993 *The travels of Marco Polo: the complete Yule-Cordier edition: including the unabridged third edition (1903) of Henry Yule's annotated translation, as revised by Henri Cordier, together with Cordier's later volume of notes and addenda (1920)*. vol. 1, New York: Dover Publications.
- Remnant, M. 2001 "Fiddle." *The New Grove dictionary of music and musicians*. vol. 8, 767-776, London: Macmillan Publishers; New York: Grove's Dictionaries.
- Rudenko, S. I. 1953 *Kul'tura naseleniya Gornogo Altaya v skifskoe vremiya*. Moscow; Leningrad: Izdatel'stvo Akademii Nauk SSSR.
- 邵国田1999「敖汉旗喇嘛溝遼代壁画墓」『内蒙古文物考古』19：90-97。
- 沈括・梅原郁1978-1981『夢溪筆談』第1冊、東京：平凡社。
- 塞野1958「馬頭琴」『中国民間故事選』192-194、北京：人民文学出版社。
- So, J. F. 2004 *Noble riders from pines and deserts: the artistic legacy of the Qidan*. Hong Kong: Art Museum, The Chinese University of Hong Kong.
- 宋濂ほか1997『元史』第6冊、北京：中華書局。
- 孫建華2009『内蒙古遼代壁画』北京：文物出版社。
- 竹越孝2006「『至元譯語』校異」『KOTONOHA』43：1-9。
- 脱脱ほか1974『遼史』第3冊、北京：中華書局。
- 等々力政彦2010「トゥバの弓奏楽器」『音のシンポジウム：鳴ります啼きます泣いてもいます～北東アジアの擦弦楽器～』26-36、京都：佛教大学宗教文化ミュージアム。
- Törbat, T., *et al.* 2009 "A rock tomb of the ancient Turkic period in the Zhargalant Khaikhan Mountains, Khovd Aimag, with the oldest preserved horse-head fiddle in Mongolia — A preliminary Report." *Current Archaeological research in Mongolia*. 365-383.
- 鳥居きみ子1927『土俗学上より観たる蒙古』東京：大鏡閣。
- Vertkov, K. A., G. I. Blagodatov & E. E. Yazovitskaya 1975 *Atlas muzykal'nykh instrumentov narodov SSSR*. 2nd ed., Moscow: Muzyka.
- Waugh, D. C. 2012 "Farewell to the marauding nomad." *The Silk Road*. 10: 158-163.
- Wright, L. 2001 "Citole." *The New Grove dictionary of music and musicians*.

vol. 5, 872-876, London: Macmillan Publishers; New York: Grove's Dictionaries.

Wyngaert, A. van den 1929 *Itinera et relationes fratrum minorum saeculi XIII et XIV*. Firenze: Ad Claras Aquas (Quaracchi-Firenze) apud Collegium S. Bonaventurae.

中国芸術研究院音楽研究所1985『中国音楽詞典』北京：人民音楽出版社。